

鰯の寿司●福崎享子

わが都立母校の祭りは火を焚いて「インターナショナル」唄ひて終へき
愛されて担がれたるは大己貴命、少彦名命と平将門

お囃しの笛はピーカンとは鳴らず五月の雨が冷え冷えと降る
空にばち振り上げ若きらがたたく将門太鼓は首塚の前で

一歯下駄草履スニーカー足袋雪駄あぶみも進むアスファルトの川

百八の氏子の町会三十キロを練りゆく千人どしや降りの中を

病室ゆ抜け来られたか蓬髪のはだけた浴衣のぢい様が立つ

宮入りに神ととのものがたり引いたら押して鎖されて差して

押し戻さむ神の御手あれば氏子衆の神輿ぐぐいと門破り入る

神輿の長をさがたたく拍子木満了の三三七拍子 輿収まれり

着輦祭のその後の輦遅々とゆく無名無数の足袋のすり足

祭りごとは人束ねむかその緩き宮司の二拝二拍手一拝

木遣りの歌並びて唄ふむかしむかし祭りをとこは男子に限りき

スーツ着て大票田へ踏み込める政好きな知事さんのヒール

鰯は光りものなり鰯の酢漬けをのせたふるさとの寿司